



梅雨空読書

そうだ、古本屋に行こう

ポコ

らいふすてーじ
編集部

はみだし
すてーじ

プロローグ

「今日も梅雨空か……」

講義室の窓に四角く切り取られた曇り空を一瞥して、ポコ君はうんざりだと言わんばかりに大きくため息をついた。この調子ではどうせ週末は雨だろう。どこに行くでもなく家で時間を持てあますのかと思うと、気分は沈む。

「どうせ家にいるなら、久しぶりに本でも読むか」

そう思ったとき、ポコ君は昼食の時間に、学友ピコ君から「古本屋がおもしろい」と聞いたことを思い出す。ポコ君は決心した。

「そうだ、古本屋に行こう！」



第一章 ポコ君、古本屋に行く

講義を終えたポコ君は、さっそく京大近くの古本屋を訪ねた。店内はどこか薄暗く、近寄りがたい。しかし実りある週末のためだと自分に言い聞かせ、彼は勇気を出して店内に足を踏み入れた。

「古本屋って言うからには古い本ばかりなのかな。僕が興味を持てる本なんて、見つかるんだろうか」

あまり期待もせずに本棚を覗く。するとどうだろう。本棚に並べられた本は、予想に反しておもしろそうなものが多い。

「これも、あっこれもおもしろそう。へえ～、意外だな。あんまり本を読まない僕でも読もうと思う本が多いや」

予想外の出来事^{*1}を不思議に思いつつ、夢中で本棚を物色するポコ君だった。



第二章 ポコ君、古本を買う

「兄ちゃん、通してくれへんか」

初老の男性の声に、ポコ君は我に返った。

「あっ、どうもすみません」

慌てて道を譲ってから、ふと時計に目をやると、針はPM 6 時を指そうとしている。ずいぶんと長居をしてしまった。

「そろそろ帰るか。それにしても、新刊本を売ってる書店にはないような本を発掘する感じ^{*2}がたまらないなあ。クセになりそうだ」

そうつぶやくと、彼は週末に読もうと選んだ本を片手にレジに足を向けた。

「〇〇円だね」

「えっ、〇〇円!? ずいぶんと安い^{*3}なあ！」

定価で買うものだとばかり思っていたポコ君は、予想外の安さに驚くのだった。

* 1. 予想外の出来事

ポコ君は偶然だと思っているが、実はこれにはちゃんと理由がある。それは、京大周辺の古本屋には多く京大生が本を持ち込むということ。

古岡書店の古岡誠店長は「すべての年齢層を対象にしなければならない書店と違い、京大周辺の古本屋は、京都大学の学生さんが興味を持って読んだ本を並べていることが多いと思います」と語る。



「あっ、この本おもしろそう」

京大周辺の古本屋は「京大生が創る本屋」なので、京大生が興味を持てる本がたくさん眠っている！

* 2. 発掘する感じ

新刊書店の棚からは消えてしまった、または店頭に並びきらない本も、古本屋にならあるかもしれない。古本屋の魅力の一つと言えるだろう。



「えっ、これで〇〇円ですか!?!」

* 3. ずいぶんと安い

古本屋で売っている本は、定価より安いことが多い。井上書店の井上道夫店長は「絶版になってしまった本や品切れの本はもちろん定価よりも高くなりますが、学生さんに需要がある教科書などは半額以下で売っていることも多いです」と言う。

文庫本や教科書など、学生がほしい本が安い！

「すててこ」の語源が膝から下の部分は捨てとこ。って知ってました？
⇒知りませんでした。感動です。

(工・3 漢水堂)
(これからも投稿お待ちしております；編)



第三章 ポコ君、店長と話す

ほしい本を安価で手に入れ、大満足のポコ君。そのまま古本屋を出ようとしたその時、ピコ君が口にしていた何気ない一言がポコ君の脳裏をかすめた。

「古本屋の醍醐味は、なんと言っても店長と交わす会話だよ」

よし。ここまで来たら、行けるところまで行ってみよう。ポコ君は店内へ引き返し、高鳴る胸の鼓動を抑えられないまま、まよとばかりに店長に話しかけた。

「あ、あの～、すみません。店長さんお勧めの本とかありますか？」

「おう、そうやね～、君はどんな本が好き*⁴なの？」

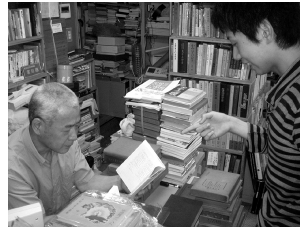
「古本屋の店長＝頑固」と思い込んでいたポコ君にとって、店長の対応は思いのほか親しみやすいものだった。

(ピコ君が楽しいと言うのもわかる)

そう思いながら、店長との会話に花を咲かせるポコ君だった。

* 4. どんな本が好き

店長との会話には、単におしゃべりに興じるということ以上の意味がある。吉岡誠店長は「『ズバリこの本がほしい!』というのではなく、『こんな感じの本を読みたい』と漠然と思っている人は、パソコンなんかでは探されませんよね。そんなとき、古本屋の店長の長年の経験にもとづく『生きた検索』が役に立つと思います。話をしたらその人の好みもわかるしね」と言う。



「その本は高校のとき読んで好きになりました」

「これが好きだったらね～……」

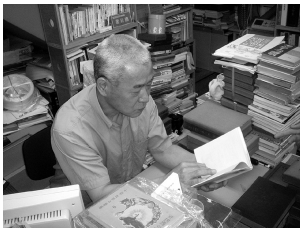
出版社名や著者名などのデータがなくても、店長が「生きた検索」で自分のほしい本を見つけてくれる!



付録 古本屋で本を売ろう!

読者諸賢におかれては、ポコ君の古本屋での小さな冒険譚、そして古本屋の大きな魅力を、お楽しみいただけたらどうか。この物語では紹介できなかったが、新刊書店にはない古本屋の最も大きな特徴のひとつとして、「自分の本を売ることができる」というものがある。

古本屋で本を売る際の注意点をいくつか挙げて、付録としたい。



「いくらで買おうかな……」

- ①ハウツー本や六法など、「そのとき(年)」にしか使えない本」は買い取ってもらいにくい。
- ②教科書や思想書など、何年経っても情報が死なず、学生に需要のある本は買い取ってもらいやすい。

エピローグ

「今日も梅雨空か……」

週末の午後、家の窓から覗くどんよりとした曇り空を見てのポコ君のつぶやきにはしかし、数日前のような暗い響きはなかった。彼の手には、古本屋で発掘した文庫本が握られている。これから出会うであろう感動的な物語や心打つ思想に思いを馳せれば、気分など沈むはずはなかった。

「ピコ君に教えてもらうまで全然意識してなかったけど、京大の近くにはずいぶん古本屋がいっぱいあるんだなあ(右地図参照)。これからはいろんな古本屋に、できるだけ足を運んでみよう」

一度古本屋の魅力を知ってしまったポコ君は、これから何度となく次のセリフを口にするようになるだろう。

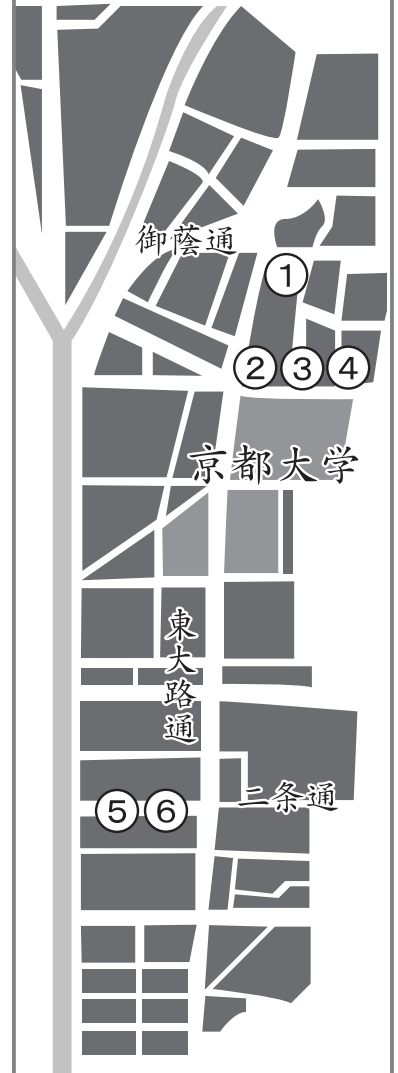
「そうだ、古本屋に行こう」

(取材協力：井上書店・吉岡書店)

はみだし
すてーじ

投稿が採用される時はいつもイタいことを書いている気がする……。これではいかん! 私の人格が疑われてしまう。よし、今回は明るいネタを書こう……。私は毎日ご飯が食べられて幸せです(*^v^*)
⇒あなたの投稿を読んで、僕も少し幸せになれた気がします。

京大周辺 古本屋MAP



- | | |
|--------|-------|
| ①福田屋書店 | ④井上書店 |
| ②吉岡書店 | ⑤中井書房 |
| ③ガリア書房 | ⑥水明洞 |

(工・4 筆名前)
(今日も元気でご飯がうまい; 編)